

2007.12

自選

五十首

三井 修



みつい おさむ 一九四八年石川県生まれ。
歌集に「砂の詩学」「洪水伝説」「アステカの王」「風紋の島」「軌跡」。評論集に「永田和宏の歌」など。「塔」会員、現代歌人協会会員、日本文藝家協会会員、北陸中日新聞選者、NHK文化センター講師、NHK学園講師。

帰りきてネクタイ解けばわが裡に角ふるわするユニコリン一角獣あり

港町ゆくトラツクが落としたる鱈一本の腸わたまで真冬

へバハレンの修は呼ぶな 臨終の父の言葉を五年経て知る

追憶に数限りなく螢炎えうつつに戻れば砂の飛ぶ音

眠らざる子に妻が読む日本の民話はいつも雪降るばかり

ハンドルの半ばを砂に埋めたる自転車があり助のごとくに

銃口につね向き合える日常か 夜を行けばまた誰何する兵

わが膝に眠りいし子が目を覚まし立ち行きてより体冷えたり

一脚の椅子半ばまで埋もれて今日砂原は切なき凶器

「歌詠みに砂漠は合わぬ」簡潔に書かれし文にひとひこだわる

西の風吹きて激しく雲流る遠くHirohitoは長病みいたり

「砂の詩学」(一九九二年)

チグリズに架かれる橋の上に立ち思えば今日は籬ひなの祭

墓に手を触れて稚き二人子は石のぬくさをふと言いにける

火を食みてみよとぞ我に語りかく柵の内なる雄おの牛の目は

鳥なりし時の記憶を今に持てばあしたわが食むエディブルフラワー

母がそこに眠れる如きゆたかさに白き牡丹が昼を咲きおり

春の夜の庭に満ちくる月光の水位しずかに上りてきたり

いまだ子は棺に花零ふるかなしみを知らずに夏の潮位見ている

今日ひと日いくつ扉をくぐりしか 木の、硝子の、あるいは心の

片燃ゆる雲の下来て不意に思うはるけき国の洪水伝説

時空ゆく旅の途中の一房の葡萄が夕べわが卓にある

濡れし翼たたむ如くに玄関で小さき黄の傘子はたたみおり

工房に青き硝子は吹かれて冬海ひしと締まりてゆけり

アステカの王の悔しみ告げにくる使者ならめ今年最初の燕

傷付きし人を論理で励まして淋しもよ帰路の寒月の照り

キリン舎にキリンは帰り夕暮れの泥濘に黒きキリンの足跡

かく一途に、一途に黄葉きいばを散らしつつ銀杏樹は静けき滅びのさ中

薔薇一輪春のしじまに耐えて咲く花たることもあるいは地獄

バスケットボールに寄せて(二首)

オフエンスが一瞬の後デフェンスに かかる展開は人生に似て

火の息を鎮めて膝をわずか曲げ神事のごとしフリースローは

「洪水伝説」(一九九五年)

「アステカの王」(一九九八年)

自選五十首を選ぶために、第一歌集

『砂の詩学』を読み返しながら、当時の事を思い出していた。この歌集は私が本格的に短歌を作り始めて七年間の作品であり、その丁度半分の三年半はペルシャ湾に浮かぶ豆粒のような小島、バハレーン(現在、日本の外務省は「バレーン」と表記する。)に住んでいた時の作品である。私はまだ三十歳代の商社員であった。今でこそ、世界中でNHKテレビが受信出来るが、当時のバハレーンでは、テレビはバハレーンや近隣アラブ諸国のアラビア語放送か隣国サウジアラビアにある石油会社の英語放送しか受信出来なかった。日本語のラジオはアフリカのガボンで中継するヨーロッパ向けラジオ・ジャパンが気象条件がよければ微かに聞こえるという程度だった。日本の新聞も現在はインターネット版が世界中どこからでも読むことができるが、当時は東京から四、五日かけて郵送されていた。そんな中で私は赴任荷物に紛れ込ませ

真昼間の砂漠を北へ急ぎゆくピザ配達人の赤きバイクが

この砂もこの世の内なり砂渡る飛鳥は恐らくこの世の外へ

滲む灯を見下ろしいしが十分後その灯の街に傘さして入る

鈴懸の並木の一樹が戦ぎ初めたちまち全樹戦ぐこの午後

遠雷の低響して抱卵のカナリヤはふと頭を上げぬ

一斉に夕雲走る 狂わずに生き来しか、否、少し狂いき

いつかわが柩となるべき幹などもこの月光に照らされいるべし

この朝気象解説者の予報へ晴れところにより時々枯れ葉

花を食むことの悦楽また孤独枝にさかさまのこのひよどりは

冬の硝子砂に撃たれて震えおり 遠く兵士の行進する午後

しんしんと花散る中に立ちながら思えば我らに兵役のなし

はつなつの海を帆走する艇のかかるまぶしさを子は生きている

肉塊にシェリー酒振りかけ炎上ぐ仕事なれども楽しかるべし

釘箱に釘が錆びゆくこの午後を逢いたきことは書かずに行たり

タルト生地まだ熱すぎる黒すぐり載せる前にまたイラクの死者達

げに傘は雨を聞き取る装置にて開けば四月の雨音集む

死のちに初めてあれは〈晩年〉と呼ぶる日々を今日も生きている

自らの軌跡を見つつ航くことの淋しもよ夏のボートの青年

歌はもつと自由でいいんだ秋空を雲がほどけて流れるように
空港の上の青空いく筋もいく筋も深く傷付けられいつ

「風紋の島」(二〇〇三年)

「軌跡」(二〇〇六年)

て持ってきた数冊の歌集をひたすら繰り返し読みながら、砂の歌を作り続けていた。日本にいたら、慢性的残業、長い通勤時間、同僚や友人との夜の付き合い、テレビや映画の誘惑などでとても時間的精神的余裕はなかっただろうが、当時のバハレーン勤務は、基本的に自分のペースで仕事ができ、仕事以外には毎日の社宅のプールでの水泳と、たまにやる砂漠コースのゴルフ以外には何もやることなく、思い切り短歌にのめり込むことが出来た。

持つて行った歌集は、佐佐木幸綱、高野公彦、小池光、三枝昂之、永田和宏など、私にとっては少し兄貴の世代の男性歌人の歌集が多かった。茂吉や白秋など、或いは現代女性歌人の作品も好きではあったが、それらは自分にとっては、言わば射程外であり、これらの男性歌人たちは、目標となり得たからだと思う。後で海外で歌を作ることの素材の特異性を僥倖のように言われることが多かったが、バハレーンは極端な言い方をすれば、砂以外には何も無いところであり、砂を歌うことは私にとって紛れもなく「日常録」だった。